

・ 作品タイトル ETD (イーティーデー)

・ 元にした作品 なし (オリジナル作品です)

・ 著者名 島津りいと (しまずりいと)

・ 本名 山本恵三 (やまもとけいぞう)

・ あらすじ (140文字)

深夜の羽田空港、停電で出発ゲートに取り残された六人の乗客は、不安を紛らわすように互いの旅の目的を語り始める。しかし、その言葉は真実ではなく、それぞれが胸に秘めた願望だった。暗闇で交わされる虚構の対話。やがて、ただ一人真実を語る老婦人の存在が、彼らの内面を静かに照らし出していく。

・ 特記事項

最終的に一七分前後の映像作品となることを前提にした短編小説です。

停電になった深夜から明け方の羽田空港ターミナルを舞台に、旅に出る見知らぬ人たち同士の内面を描き、旅立ち、空港、未明の時間、移ろいゆく人生の美しさを表現します。

映像化における、撮影ロケーションとキャストイングの実現性も考慮しました。

・ 本編の文字数 4966文字 (タイトル、改行、空白行を含めず)

ETD (イーティーデー)

島津りいと

白石俊平は、羽田空港のメインビルで出国審査をすませ、サテライトコンコースに向かった。シンガポール行き深夜便の出発ゲートはその別棟にある。駐機エリアの真ん中に離島のように設置され、メインビルとは地下通路の動く歩道でつながっている。

出発予定は定刻の午前1時30分。まだ2時間近くある。ゲートには早く着いてしまいが、メールを片付けて映画でも観ていれば時間は潰せるだろう。

今夜のサテライトコンコースからの出発は、この便だけのようだ。乗客はまだほとんどゲート付近に来ていない。夕方から激しく降り続く雨の音だけが、わずかに館内に響いている。

俊平がゲート近くの椅子に腰を下ろした時、何か弾け飛ぶような金属音とともに、館内の照明が一斉に落ちた。遠くで小さな悲鳴がして、駐機場に等間隔に並ぶ照明灯が窓に浮かび上がった。雨はさらに強くなり、雷鳴が轟き始めた。

コンコースの各所で小さなLEDの光が動いている。既にコンコースにいた乗客が、暗闇の中、スマホのライトを点けたのだろう。

しばらくして淡いオレンジ色の非常灯が点灯すると同時に、粗い音質の館内アナウンスが流れた。

「お客様にお知らせいたします。先ほどの落雷により、ターミナルビルの一部で停電が発生しています。安全確保が確認されるまで、当空港を発着するすべてのフライトの運航を一時停止いたします。メインビルとサテライトコンコースを結ぶ連絡通路は、豪雨による浸水と停電により現在、閉鎖しております……」

俊平は舌打ちした。シンガポールでは明日の午前中にプレゼンがある。遅れるわけにはいかない。メインビルへの地下通路も通行できないとなると、別の便への振り替えもできない。

気がつくと、携帯電話の電波も消えている。豪雨と落雷の影響だろう。館内のWiFiもダウンしているようだ。周囲には警備員や空港職員もおらず、サテライトコンコースに取り残された状態になってしまった。

何もできないまま不安な気分ではばらく座っていた。すると、暗闇の中、いくつかのLEDの光が俊平に近づいているのが見えた。思わず警戒して、機内持ち込みのバッグを引

き寄せた。

ライトの持ち主は、五人の男女だった。全員、日本人のようだ。機敏な動きの若い女性。穏やかな印象の中年男性。聡明な表情の中年女性。軽薄な感じの若い男性。そして、おとなしそうな老婦人。暗闇の中、表情はどれも不安げだ。

「あの」

若い女性が俊平に声をかけた。つとめて明るくしている声だ。

「停電、かなりやばそう。いろいろ不安なので、復旧まで一カ所に集まっているのがいんじゃないかって」

「このサテライトには、人が少ないみたいですからね」

「ご一緒してもらっていいですか？」

見知らぬ人と距離を縮めるのが得意ではない俊平は、正直、抵抗があった。しかし、この状況ではやむを得ない。

「いいですよ」

そう言いながら、どうせすぐに復旧するだろうとも考えていた。

六人が少し距離を取って椅子に座った。

「やることないっすね……。スマホのバッテリーも温存したいし」

若い男性が椅子に横になった。

「何か話しましょうよ。話してないと、不安になりませんか？」

中年男性が苦笑いのような顔で言った。

「確かに、できることは限られてるし」

知的な雰囲気的中年女性がそう応えた。隣の老婦人は黙っている。

「じゃあ、そうしましょう。まず私から……。私は、就活一旦休んでアジア回るんで、シンガポール経由でバンコクに行く予定です。みなさんはどちらまで？」

最初に声をかけた若い女性が続けた。

「シンガポールに数日いて、ミュンヘンに行きます」

隣にいた中年男性が言った。

「俺はチャンギで乗り継いでシドニーへ」

若い男性が椅子から起き上がって答えた。

「私はシンガポールに住んでいるので、これが帰り便です」

中年女性がゆつくりと話した。そして四人の目線がなんとなく、老婦人に向けられた。

「私は……えっと、ニューヨークに……」

その時、窓の外で雷鳴が轟き、老婦人の声はかき消されてしまった。

誰もが、「ここからは今夜シンガポール行きしか出発しないのに」と思ったはずだ。しかし、老婦人は言葉を濁しているようでもあり、それ以上は尋ねられない雰囲気だった。少々気まずい雰囲気を感じた中年男性が、話を戻すように若い女性に向かって言った。

「就活やめてアジア周遊なんてすごい勇氣」

「いいいえそんな。ドイツは仕事ですか？」

「会社辞めて、都市型農業の勉強に」

「え、マジですか？」

若者が身を乗り出した。

「商社で各地を回ってたんですが、自分でも農業やりたくなって。それも都会で」

「なんかわかります。俺はシドニーで美容師として独立するんで、その準備に」

「美容師なの？」

中年女性が若者に尋ねた。

「まあ、一応。そちらはシンガポールで何を？」

「研究者です。大学の機関で」

若い男が何か聞こうとするのを遮り、

「えー、すごい。ずっと向こうに住むんですか？」

と、若い女性が目を輝かせて訊ねた。

「そのつもりです……」

女性は呟くようにそう言って、黙ってしまった。若い男も黙っている。

あたりは暗いままで、周囲には誰もいない。まるで山の中で野営をしているグループのようだ。窓の外には、雨が降り続けている。

しばらくの静寂の後、全員が俊平に目をやった。まだ話していないのは俊平だけなのだ。

少し間をおいて、俊平はこう話した。

「カメラマンです。アフリカに撮影に行くために、シンガポール経由で移動します」

周囲の五人から「へえ」というような声が漏れたが、俊平はそれ以上話が続かないことを願った。自分がカメラマンというのは嘘だったからだ。正確には、それは長年の願望だった。

外資の広告代理店に勤務する俊平は、アジア太平洋地区の本部が東京からシンガポールに移って以来、毎月のようにシンガポールに出張していた。クリエイティブを生み出すための仕事のはずが、移動というタスクをこなすためだけになっていると感じていた。専門のプロカメラマンになりたいというのは、若いころからの夢だった。

しかし、なぜ今、この停電の羽田空港で、見知らぬ人たちに嘘をついてしまったのか。自分の不誠実さに嫌気がさす。

会話が途切れ、しばらく誰も言葉を発しない。沈黙と外の雨音だけが、薄暗いサテライトコンコースを支配している。

自分や周囲の五人の存在がもはや曖昧に感じられるほど、空虚な時間が過ぎていく。それが永遠に続くような絶望感と、五秒後に終わるような期待感が入り混じる、不思議な時間だ。時折、誰ともなくどうでもいい話題を小さな声で口にする。

天候、フライトの出発時刻、シンガポールでの乗り継ぎ時間、旅の予定など。しかし、会話は続かず、静けさがすぐにやってくる。

雨音だけが響くそんな時間に、俊平以外の五人もそれぞれのことを考えていた。

最初に声をかけてきた若い女性は、五人に「就活を休んで、アジアを周遊する」とうそぶいたが、実際は第三志望の中小企業の現地研修でベトナムに赴く途中だった。望まない就職への反動なのか、フットワークの軽いバックパッカーのような雰囲気を出している自分が嫌だった。ただ、その振る舞いは自らの願望ではある。

隣に座っていた中年男性は、どこか憂鬱そうな俊平の姿に自分を重ねていた。実はまだ商社を辞めておらず、ましてや都市型農業を学ぶなど事実ではない。実際は、取引先に契約の不利を謝罪するための出張だった。見知らぬ他人相手でも、すぐにバレそうな嘘をついている自分に耐えられない。ただ、ドイツで農業を勉強するというのは、長年の強い希望ではある。

窓の外では雷鳴はすでに止んでいる。

その向こうに座っていた中年女性は、先ほど、研究者としてこの先もシンガポールに住む予定だと言い切ってしまったことを後悔していた。先月で所属先から解雇され、日本への帰国を決めたというのに。今日現地に向かうのは、勢いで購入したマンションの売却手続きのためだった。事実ではないことを平然と話す自分が信じられない。ただ、研究者としてシンガポールに住み続けるのは、自分が望んでいたことではある。

若い男性は、再び椅子に寝転がりながら自問していた。「俺は、どうしてああも簡単に嘘をついてしまうのか」と。シドニーで美容師として独立する準備などと、よく言えたものだ。以前、ワーキングホリデーでオーストラリアに住んだことはある。日本人の経営する美容院で雑用のアルバイトはしたが、すぐに飽きて帰国した。その後、日本でも何も上手くないか、よせばいいのに、観光ビザでオーストラリアに戻ろうとしている。あまりに軽薄な自分に吐き気さえ覚えるが、今度はあの美容院で真面目に下働きからできないかと真剣に考えている。それは叶うかどうか全くわからない、夢のようなものだけれど。

静けさの中で、雨は降り続けている。雨足は少し弱まっているようだ。その後も、アナウンスは何もない。緊急事態だというのに、対応があまりに不十分なのではないか。不安が不満に少しずつ変わっていく中、かなり長い沈黙の後に、老婦人が明瞭な声で話し出した。

「私、ニューヨークに行くんです。もう年金生活者で無職ですけど、旅することはやめられなくて。シンガポールに行つて、明後日のシンガポールからニューヨークの世界最長のノンストップフライトに乗ります。エアバスのA350-900ULRは、一般人が体験できる、現在の最高峰の航空技術とサービスなんです」

全員が呆気に取られて、老婦人を見た。驚きとともに、積極的に旅する姿勢に敬意を抱きながら。彼女は、本当にニューヨークに行くのだ。この老婦人だけが嘘も偽りもなく、ひたすら旅をすることだけを目的に、最初からここにいたのだ。

かなりの時間が過ぎ、突然、館内の照明が復旧した。シンガポール行きフライトの出発ゲートの案内モニターも再点灯した。そこには、「ETD 05:30」と表示されている。

「もしかしてこれ、出発が5時30分に決まったってことですか？」

若い男性が喜びを隠せない、という表情で聞いた。

「そうみたいです」

俊平が答えた。

「あと、一時間ちよつと。やった！ これならチャンギ空港でなんとか乗り継ぎできると若い男性。

「よかった。これで、バンコク行きフライトの取り直しも手配できそう」

若い女性が安堵している。

「電源が戻って、ETDが表示されたということは、ターミナルが復旧して、フライトの運航も再開されることは間違いない」

中年男性が、確信を持ってそう話した。

「ところで、ETDって何ですか？」

若い男が聞いた。

「Estimated Time of Departure、出発予定時刻の略。まあ、百パーセント確定してるわけじゃないので、航空会社の『願望』みたいなものかな」

俊平は答えた。

「ついでに言うと、STDはスケジュールの出発時刻。ATDは実際に出発した時刻。元々は航空用語だけど、飛行機の旅には、知ってて損はないかも」

「覚えておこう」

若い女性が言った。

「スケジュールされたこと、予定されること、実際に起きたこと、なんですね」

研究者だという女性が呟くように言った。

老婦人は、ただ黙って、窓の外を見ている。雨はようやく上がった。雲の向こうに僅かに朝焼けのような光が広がり始めている。まもなく濡れた駐機場の路面や誘導路、滑走路が朝日に輝くだろう。

館内の電源は完全に復旧したようで、アナウンスも正常に流れ始めた。停電とフライトの遅延を詫び、運航再開が告げられた。本館との連絡通路も再開したようだ。

携帯電話の電波も、館内のWiFiも再開している。航空会社からも、フライトの新しい出発予定時間がメールで通知されてきた。

出発時刻が近づき、搭乗時間になった。乗客も出発ゲートに揃っている。

まるで深夜の五時間ほどが、夢の中だったようだ。

互いに「それでは「どうも」「助かりました」「よかった」などと言いながら、散会するかというときに、老婦人が口を開いた。

「ETDはほぼSTD通りには行かないけど、どうATDにするかは、自分次第ですね。みなさん、ありがとう」

私たちは旅立つのだ。それぞれの願望をいつか現実にする。ETDをATDにする。

「良き道行を」

「楽しんで」

「旅のご武運を」

「前に進みましょう」

「良い旅を」

それぞれの旅が、さらに続いていく。

(了)